

## 18 世紀ロシアの『パイドーン』？ —シチェルバートフ『魂の不死に関する対話』と 1770-80 年代のプラトン受容—

鳥山 祐介

ロシアにおけるプラトン哲学の受容に関する文献を調べていると、19 世紀半ばから 20 世紀初頭の受用史に関する研究が比較的充実している一方で、それ以前の時代、特に 18 世紀に関する研究蓄積の少ないことに気づかされる。ネザーコットやチホラスのモノグラフも、18 世紀には大きな関心を記していない。<sup>1</sup> とはいえ当然ながら、ピョートル改革以降、西欧文化の摂取が貪欲に行われた百年の間、プラトンの著作がロシアで全く知られなかったわけではない。2013 年のミロシニチェンコの研究書が比較的詳しく述べているように、ロシアでは 1770-80 年代に大規模な著作集の翻訳刊行が行われるなど、プラトン受容に一つの波が訪れている。<sup>2</sup>

ミハイル・シチェルバートフ Михаил Михайлович Щербатов (1733-90) の『魂の不死に関する対話 Разговор о бессмертии души』(1788) は、この時期のロシアにプラトンがもたらした影響の一端を示す事例であり、特にプラトンとの影響関係が明記されたオリジナルの著作であるという点で、この時期の作品として貴重な存在である。この作品は、著者自身によりプラトンの『パイドーン』の模倣とされ、ミロシニチェンコにより「ロシアの啓蒙主義者の間でのプラトンという人物への関心の高まりを示すだけでなく、プラトンをキリスト教化するロシア思想史上初の試みのうちの一つ」と位置付けられた。<sup>3</sup> しかしながら、実際のところ、シチェルバートフと『パイドーン』との間には、それほど深い思想的な継承関係が見られるわけではない。では、この作品がプラトンとのつながりをうたったのはなぜなのか。そこにはどのような意味があるのか。

本稿では、この作品の内容を当時のプラトン受容という文脈に照らし合わせつつ検討することを通して、上記の点を考察する。それにあたり、まずは当時のプラトン受容史を簡

<sup>1</sup> Frances Nethercott, *Russia's Plato: Plato and Platonic Tradition in Russian Education, Science and Ideology (1840-1980)* (Aldershot, Burlington, Singapore, Sydney: Ashgate Publishing, 2000); Тихолаз А. Платон и платонизм в русской религиозной философии второй половины XIX - начала XX веков. Киев, 2003.

<sup>2</sup> Мирошниченко Е.И. Очерки по истории раннего платонизма в России. Статьи по истории русской философии. СПб., 2013.

<sup>3</sup> Там же. С. 30.

単に整理し、その後に『魂の不死に関する対話』への具体的なアプローチを試みる。

## 1. 1770-80年代ロシアのプラトン受容

### ノヴィコフ『朝の光』誌による先駆的紹介

18世紀以前のロシアで、プラトン哲学の体系的な受容が行われた形跡はない。「プラトンはルーシではほとんど無名であった。17世紀の後半まで、プラトンの著作のオリジナルのテキストはルーシに存在しなかった。プラトンの形而上学、認識論に関する記述は18世紀後半までロシアで一度もなされなかった」。<sup>4</sup> 多くの場合、古代の非キリスト教哲学、特にプラトンに対しては教会から懐疑の眼が向けられた。

この状況に変化が見られるのは18世紀半ば以降である。プラトンの名は1740年代には既にロシアでも有名で、「この時代のある程度重要な作家は皆、著作の中にこの名前を登場させている」ともされる。<sup>5</sup> 例えば、ロモノーソフは女帝エリザヴェータの即位記念日に寄せた1747年の頌詩に、次のような一節を盛り込んでいる。

汝らよ、今や堂々と／その努力を示してもいい頃だ／ロシアの地が自前のプラトンたちや／  
聡き頭脳のニュートンたちを／生み出すことができることを。<sup>6</sup>

エカテリーナ二世は、即位前の1749年、モスクワ到着の直後にプラトンを読んだことを手記に記した。<sup>7</sup> そして、彼女の治世は、特に1770年代以降、ロシアにおけるプラトン受容の転機となる。この時期の定期刊行物にはプラトンに関する記事が頻出することだが、中でも早い時期にプラトンの著作や関連する諸作品の翻訳を掲載したのが、ノヴィコフが出版する雑誌『朝の光』であった。

『朝の光』は1777年9月から1780年8月まで、計36号が発刊された月刊誌で、1779年5月まではペテルブルク、それ以降はノヴィコフの転居に伴いモスクワに本拠を置いた。ノヴィコフ以下、執筆陣はフリーメイソンのメンバーであった。道徳的、宗教的内容の記事が多く、文学作品ではヴィーラント、グスナー、ヤング、哲学ではパスカル、ベーコンなどの翻訳が掲載された。プラトンとの関連では、まず1777年9月から11月にかけて「フェードン、あるいは魂の不死について」と題された論稿が掲載されている。「第1の対話」

<sup>4</sup> Там же. С. 14.

<sup>5</sup> Там же. С. 29.

<sup>6</sup> Ломоносов М.В. Ода на день восшествия на Всероссийский престол Ея Величества Государыни Императрицы Елисаветы Петровны 1747 года // Ломоносов М.В. Полное собрание сочинений. Т. 8. М.; Л., 1959. С. 206.

<sup>7</sup> Записки императрицы Екатерины II. Репринтное воспроизведение издания 1859. М., 1990. С. 77.

「第2の対話」「第3の対話」の三つから成るこの翻訳作品は、18世紀ドイツの哲学者モーゼス・メンデルスゾーンによるプラトン『パイドーン』の翻案『フェードン』のロシア語訳であった。シチェルバートフは『魂の不死について』を執筆するに当たり、この翻訳を念頭に置いていた可能性があるとする論者もいる。<sup>8</sup>

ついで1778年10月に掲載された論考「テアゲス、あるいは知恵についての対話」は、プラトン作品の中でも偽作とされる『テアゲス』の翻訳と考えられる。さらに翌年の2月には、『プラトンの饗宴、愛について』と題された、プラトンの『饗宴』の抄訳が載せられた。なおこの雑誌には、アリストテレスやソクラテスなど数々の哲学者を扱った「哲学者の生涯」という連載記事があり、1779年1月にはプラトンの生涯を扱った。このように、出版を通してロシアで最初にプラトン思想の普及を試みたのが『朝の光』であった。

### 「哲人女帝」の一大プロジェクト

ノヴィコフによる紹介からわずか後の1780年には、遙かに規模の大きい、史上初のロシア語版プラトン作品集の刊行が始まっている。『いと賢きプラトンの著作集』と題され、ギリシア語原典からの翻訳と銘打ったこの作品集は全三巻から成り、以下に掲げるように数多くの作品が翻訳された。<sup>9</sup> とはいえ、『ティマイオス』『クリティアス』『メネクセノス』『クラテュロス』『ソピステス』『パルメニデス』をはじめ、収録されていない作品もある。

第1巻(1780)：『リュシス』『エウテュデモス』『余所者』『エウテュプロン』『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドーン』『アルキビアデスI』『アルキビアデスII』『ラケス』『プロタゴラス』『メノン』『ピレボス』『イオン』『ゴルギアス』『恋がたき』

第2巻(1783)上：『テアイテトス』『饗宴』『パイドロス』『ヒッピアス(大)』『ヒッピアス(小)』『カルミデス』『ポリティコス』、下：『国家』

第3巻(1785)：『法律』

この作品集の翻訳を担当したのは、イワン・シドロフスキー Иван Иванович

<sup>8</sup> Артемьева Т.В. Примечания // Мысли о душе. Русская метафизика XVIII века. СПб., 1996. С. 304.

<sup>9</sup> Творения велемудрого Платона. Часть первая преложенная с греческого языка на российский священником Иоанном Сидоровский, и коллежский регистратором Матфием Пахоновым, находящимся при Обществе благородных девиц. Ч. 1-3. СПб., при Имп. Акад. Наук. 1780-1785. 書誌情報については以下も参照。Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века. 1725-1800. Т. 2. М., 1964. С. 422-423.

Сидоровский (1748-95), マトヴェイ・パホモフ Матвей Сергеевич Пахомов (1745-92) の二人である。シドロフスキーは正教司祭で、スモーリヌィ女学校の神学教師であった。1783年には科学アカデミーの会員となり、ロシア語源辞典の編纂やロシア文法の執筆に参加する。1783-84年には女学校の生徒用の教科書として宗教的な内容の著作を二冊執筆した。<sup>10</sup> 一方、パホモフはアルハンゲリスクの商人の出身で、1772年にスモーリヌィ女学校の教員となり、文法、代数学、地理、歴史、独仏語を教えていた。プラトン作品集では主訳者となり、ルキアノスの対話集、パウサニアス『ギリシア案内記』などもシドロフスキーと共に翻訳した。<sup>11</sup>

このプラトン作品集に訳者の名が記された作品はほとんどないが、1783年に刊行された『饗宴』にはパホモフが署名している。ミロシニチェンコはこの点について、先立つ1779年の『朝の光』に『饗宴』のロシア語訳が既に現れていたことから、新しい別の訳であることを読者に明示するためであったのではないかと推測している。なお、第3巻『法律』の翻訳はシドロフスキーが担当している。<sup>12</sup>

「この翻訳の発行部数は300部で、プラトン哲学の普及に目覚ましい影響を与えたことはなかったものの、アリストテレス、ライプニッツ、ヴォルフの哲学的伝統から脱した新しい哲学的傾向がロシアに生まれていたことを示している」とアブラーモフは述べた。<sup>13</sup> 確かにこの翻訳によってロシアにおけるプラトンの認知が飛躍的に増したということはないだろう。しかし、この翻訳事業には、プラトン哲学の普及とは別の効果も期待されていたと考えられる。エカテリーナ女帝の発案により結成された「外国書籍翻訳協会」が、その出版に携わっていたからである。<sup>14</sup>

外国書籍翻訳協会の結成は女帝により1768年に発案され、1783年までに174巻、112点の外国書籍の出版を行った。翻訳者には女帝自身より助成金が与えられ、また原稿の選択に彼女自身が大きな影響力を持った。<sup>15</sup> 出版物の内容は同時代のヨーロッパ作家の著作から地理歴史、自然科学まで様々であったが、特に力を入れられたのが古代ギリシア・ロー

---

<sup>10</sup> Ермолаева, Л.М. Сидоровский Иван Иванович // Словарь русских писателей XVIII века. Вып. 3. Л., 2010. С. 123-124.

<sup>11</sup> Ермолаева, Л.М. Пахомов Матвей Сергеевич // Словарь русских писателей XVIII века. Вып. 2. Л., 1999. С. 415-416.

<sup>12</sup> Мирошниченко. Очерки по истории раннего платонизма в России. С. 36.

<sup>13</sup> Абрамов А.И. Оценка философии Платона в русской идеалистической философии // Платон и его эпоха. М., 1979. С. 212-237.

<sup>14</sup> Семенников, В.П. Собрание старающегося о переводе иностранных книг, учрежденное Екатериной II. 1768-1783 гг. СПб., 1913. С. 63.

<sup>15</sup> ゲーリー・マーカー (白倉克文訳) 『ロシア出版文化史—十八世紀の印刷業と知識人』成文社, 2014年, 123-124頁。

マの作品であった。ここにも女帝の意向が働いていたと見られる。<sup>16</sup> 1780年に刊行されたプラトン作品集の第1巻巻頭には、訳者による前書きが添えられている。その冒頭の記述は、当時のロシアでプラトンの名がどのように利用され得たかを示しており興味深い。

我らの祖国ロシアの幸福を全世界が驚きをもって見守っている。我が国はそうした高みに登りつめ、まさに黄金時代のただ中にあるのだ。とはいえどんな国の幸福も、ただ最高権力者の叡智でなくて何を源泉にし得るだろうか？古代の哲学者の中でもとりわけ名高いプラトンは、この真理をいかなる疑念とも無縁なものと考えた。彼は『国家』の第5巻で、王が知を愛する者である時か、知を愛する者が王となった時に、どんな国家も幸福状態に達するであろうと述べる。こうした真理は、あたかもプラトンが予言として語ったかのように、過去のどの時代にもまして今のロシアで実現を見ているのだ。<sup>17</sup>

ここで留意したいのは、プラトンの『国家』における哲人王をめぐる議論が、ロシアの現状を肯定し、現君主のエカテリーナ二世を称揚するために想起、援用されていることである。さらに続いて訳者は次のように述べる。

この上ない叡智の持ち主、我らが真の国母、自ら治めるロシアをただ幸福の殿堂に導くべく定められたお方は、その目的を達成する無数の手段のうち、民の啓蒙を第一の手段として選ばれた。幸福を産み出す徳は、魂が学問の光に照らされたときにのみ人の心に宿ることをご存知であったからである。<sup>18</sup>

君主や国家の称賛は当時の書物の前書きなどに比較的好く見られた修辞だが、ここではそのように叡智を賛美されるエカテリーナが、プラトンが理想とした「哲人王」の姿と重ね合わされる。さらにこの前書きでは、女帝の輝かしい事績の一つとして「古今の著名な作家の著作のロシア語訳を助ける協会の設立」が挙げられ、「この協会の並々ならぬ努力により、今やプラトンがロシアに姿を現した」とされる。むろんこの「協会」は、上述の外国書籍翻訳協会を指す。このように、1780年に始まったプラトン作品集の刊行の背後には、「啓蒙専制君主」エカテリーナが存在がちらついていた。

<sup>16</sup> Семенников. Собрание старяющегося о переводе. С. 13-14.

<sup>17</sup> Творения велемудрого Платона часть первая. СПб., 1780. С. I.

<sup>18</sup> Там же. С. I-II.

## 2. 「プラトンの模倣をしつつ、魂の不死をめぐる対話篇を書くこと」

ミハイル・シチュルバートフ<sup>19</sup>の『魂の不死についての対話』は、1788年に執筆された。前章で述べたプラトン作品集が完結してわずか3年後に書かれたこの作品は、様々なレベルでプラトンと結びついている。まず、ここでは『パイドーン』の主題である「魂の不死」をめぐる問題が、直接主題として取り上げられている。また、プラトンの対話篇と同じように、この作品の主たる部分是对話によって構成されている。ここでは、政治犯として獄中にあったアンナ女帝時代のロシア貴族フルシチョフが、自分の死刑執行を間近に控え、若い士官ココヴィンスキーを聞き役として、まさにプラトンの『パイドーン』におけるソクラテスと同じように、魂の不死の証明を試みるのである。

その主部に先立つ「前書き」で、著者はこの論稿の執筆に至る経緯を説明する。それによると彼は、1781年に持ち村に滞在していた時に三日間にわたり激しい腹痛に見舞われ、死を覚悟する中で魂の不死に関する思索を巡らせた。後に「主の恵みによってこの病から解放された」彼は、「病気の間になされた思索を紙の上に記したいと思い」、執筆に取り掛かった。しかし、様々な事情により仕事が遅れ、結局論稿は1788年に完成したとのことである(263)。<sup>20</sup>

この「前書き」で彼は、論稿の執筆を促したのがプラトンとの出会いであったことについても述べている。

いま私は、ギリシアの哲学者プラトンの著作を読み、とりわけパイドーンと題されたその対話篇に感嘆した。そこで彼が登場させているソクラテスは、死刑を宣告されながら、毒を飲む前に、まさにその同じ日に友人たちと魂の不死について対話するのだ(263)。

---

<sup>19</sup> 由緒ある貴族の家に生まれる。幼児にセミョーフ連隊に登録、1762年に「貴族の自由に関する布告」を受けて退役。1767年にヤロスラーヴリ貴族団の代議員に選出され、エカテリーナ二世の発案になる立法委員会のメンバーとなる。貴族階級の利益を守るためにリベラルな少数派と論争を重ねる。またこれより前にロシア史の著作に手を染め、1769年に最初に二巻が出版。115巻に及ぶ。ロシア史の出版は死後まで続いた。1776-77年にかけてロシア初の統計学の書物を出版。1778年に税務庁長官、1779年に元老院のメンバーとなる。80年代終わりには宮廷批判の書「ロシアの道徳の退廃について」を執筆したが、当時は公にされず1858年にゲルツェンによってロンドンで刊行される。1783-84年頃には『オフィル国旅行記』というユートピア小説(未完)も執筆した。若い頃からフリーメイソンに関心を示し、1775-76年には自ら親方となったロッジ「平等」の会合が彼の家で行われていた。Травников С.Н. Щербатов Михаил Михайлович // Словарь русских писателей XVIII века. Вып. 3. С. 438.

<sup>20</sup> 以下、この作品からの引用は次の版に拠り、括弧内に頁数を示す。Щербатов М.М. Разговор о бессмертии души // Мысль о душе. С. 262-291.

さらに続けて彼は、見事に書かれたプラトンの対話篇を前にしては、本来同じ問題について書く意欲など湧かなくても当然であったと述べる。とはいえ彼にとって、キリスト教徒でなかったプラトンの対話篇には欠けているものがあつた。

しかし私は、プラトンの叡智とこの対話篇の素晴らしさに驚嘆しつつも、あることに気付いた。彼が古代ギリシアの人間であるため、彼は魂の不死を論証するために必要なもの全てを注ぎ込んだが、この対話篇には欠けているもの、現れることのできなかつたものがある。即ち、キリスト教の掟による啓蒙と、後に自然の中で実現を見た啓示である。このことが、プラトンの模倣をしつつ、魂の不死をめぐる似たような対話篇を書くことを私に促したのだ (263)。

このように、著者によれば「キリスト教徒の視点を入れつつ、プラトンの模倣をすること」「プラトンをキリスト教の文脈から改変する」ことが、この作品の執筆の動機である。この点でシチェルバートフの試みはメンデルスゾーン『フェードン』と目的を共有するものと言える。ただし後述するように、シチェルバートフのこの作品は、プラトンの『パイドーン』から「魂の不死」というテーマや叙述の枠組などは受け継いでいながら、内容自体は完全に別の作品となっている。ソクラテスを登場させ、『パイドーン』の設定を概ね踏襲したメンデルスゾーンの『フェードン』が、様々な相違点もあるとはいえ大体において『パイドーン』の「リメイク」と呼びうるのとは異なっている。<sup>21</sup>

一方、シチェルバートフにおいて注目されるのは、プラトンの対話篇という形式が、ロシアの社会的・歴史的な文脈の中に持ち込まれていることである。ここで、対話者は「読者の関心を惹くように、人物は架空ではなく、その取り巻く状況もよく知られた、名門の人物でなければならない」(263)という基準で選ばれたとされる。シチェルバートフが対話の背景に設定したのは「狩猟長官にして大臣であつたアルテミー・ペトロヴィチ・ヴォルィンスキーの不幸な死にまつわる一件」であつた。ヴォルィンスキー A.П. Вольтский (1689-1740) は 18 世紀前半の有力政治家で、ピョートル期の勲功で出世したものの、女帝アンナとピロンのもとで国家反逆罪との咎で「不名誉な死」を命じられる。彼はまた、元老院の役割の復活、世襲貴族の政治的役割の強化、国家の主要ポストからの外国人の除外といった提案を含む国家改革案を示した人物であり、政治的立場はシチェルバートフと近い。本作品でもこの人物は「公布されたマニフェストが示すように公正で聡明な人物が讒言によって死を迎えたことは、犯罪と不幸のなせるわざであつた。彼と共に他の多くの人々が死んだり苦難を忍んだりしたが、私が知る限り、全て極めて誠実で聡明

<sup>21</sup> メンデルスゾーンとプラトンの相違点については以下を参照。藤井良彦「メンデルスゾーンの『フェードン』とプラトンの『パイドーン』について」『ユダヤ・イスラエル研究』第 26 号, 2012 年, 52-64 頁。

な人物であった」(263)と、高く評価されている。

シチエルバートフの対話篇で、ソクラテスに替わる役割として登場するのが、ヴォルィンスキーの盟友でありともに国家反逆際に問われたアンドレイ・フォードロヴィチ・フルシチョフ A.Ф. Фрушев (1691-1740) という人物である。彼はピョートル大帝の盟友であり、1730年代末にヴォルィンスキーの周辺に形成されていた世襲貴族の政治的権利の拡大を目指す一派に接近した。外国人や寵臣を廃した内政に関する「全般的計画」の起草に際してヴォルィンスキーに助力したが、彼と同時に国家反逆罪に問われ、1740年6月27日にペテルブルクで処刑された。シチエルバートフは彼を「美德と知性と教養において優れ、哲学を愛し熱意を注いだ人物であり、フェヌロンの見事な著作『ユリスの子テレマックの冒険』を翻訳した人物」(264)と紹介する。また、彼が「ソクラテスと同じような状況に置かれていることで、この対話篇はプラトンの『パイドーン』により似てくるだろう」(264)ともされている。

フルシチョフの対話者として選ばれたのは、当時執行官であった親衛隊の士官ニキータ・フォードロヴィチ・ココヴィンスキーで、この人物は「誠実で、聡明で、思いやりのある人物」として描かれる。著者はこの設定について、ソクラテス時代のアテネでは友人や親族が死刑囚を訪問することができたが、アンナ時代の秘密警察を訪れることができたのは裁判官や執行官、看守、刑吏のみであったため、当時その立場にあったココヴィンスキーを選んだと説明している。

「前書き」に続く『魂の不死に関する対話』の本編の冒頭には、プラトンの対話篇に見られるような導入部が置かれている。時は夜中の2時、獄中のフルシチョフ(以下"Xp."と記されている)をココヴィンスキーが(以下"Кок.")訪ねる。立ち去ろうとするココヴィンスキーをフルシチョフは引き留め、対話の相手になるようせがむ。ココヴィンスキーは、こうした状況でも人には君主の慈悲と神の憐れみという、支えとなる二つの希望があると述べてフルシチョフを慰めようとする。君主の慈悲に望みを託すことはできないとするフルシチョフは、神の憐れみについてこう述べる。

自分は常に神の憐みにすがり、また魂の不死を創造主からの最も貴い賜物と考えてきた。従って私は死に行くとは言わず、引越せしめると言う。あるいはより適切な言い方をすれば、自分の魂が留まっている家を壊し、魂に引越せしめをさせるということだ(266)。

「魂の不死」という主題がここで初めて提示され、フルシチョフがそれを神との関係性の中で肯定していることが示される。素朴な信仰者ココヴィンスキーはフルシチョフの態度に安堵し、「読書する人の多くは神の憐みや魂の不死とは相いれない大胆な考えを抱くのではないか」と尋ねる。これに対しフルシチョフは、しっかりした知的基盤を持ち、思考



しつづつ読書すれば、そうした大胆な思想が考えを揺るがすことはなく、それどころか、そうした大胆な思想の根拠の弱さが真理を補強するものだと述べる。

さらにフルシチョフは、魂の不死は「1. ほとんど数学的な証明」「2. 自分自身の感覚」「3. 世界のあらゆる民族の同意」「4. 全ての賢者たちの同意」「5. これを覆す人々の個人的な振る舞い」「6. 神の裁き」「7. キリスト教徒としての信仰だけでなく、健全な理性と最も厳密な哲学が信じるよう命じているような伝説に基いた信仰」という七つの事項により確信できると言う（267）。以下の部分では、フルシチョフがこの7項目に即して魂の不死を「証明」していく。

### 3. 『魂の不死についての対話』における魂の不死の「証明」

#### 数学的な証明

「誰でも、魂の不死を強く確信していなければ心安らぐことはできない」と言うココヴィンスキーに対し、フルシチョフは「それは誠実な人の傾向だ」（268）と答える。悪人にとって、魂の死は悪からの解放を意味するので身体と共に魂が消え去ったほうがよいという考えは『パイドーン』にも見られた。<sup>22</sup>

次いでフルシチョフは、魂の持つ性質を確認する。まず、人間は眼や耳や舌といった身体の器官によって様々な感覚を得るが、死んだ直後の人間は、身体の部分が完全に残っていても、既に感覚を有していない。従って、人間が感覚を得る上で身体はあくまで道具にすぎず、感覚それ自体は魂から生じる。さらに、人が戦闘などで腕や脚を失ったり、血を抜かれたりしてもその理性や感覚は減じないところから、感覚は「我々の中に宿り、体全体にその作用を広げ、我々の身体の部分を道具として用いる、ある存在から生じる」とされる。この「ある存在」が他ならぬ魂である（270）。

そして、論点は魂の不分割性に移る。体の一部分が切り取られても、魂は減じること、分割されることがない。一方、死者の印は身体の腐敗、分解であるが、魂は部分を持つておらず、分解もされず、消えることもない。従ってそれは不死である。これがフルシチョフが「ほとんど数学的な証明」とする説明である（271）。

#### 自分自身の感覚

人間が眠っているとき、その体は「ある種の死んだ状態、感覚のない状態」となるが、眠っている間に夢を見るという事実は、魂が常に覚醒しており、身体的な弱点を持たない存在であることを示している。このことは魂が不死の存在であることを証明する。夢を見

<sup>22</sup> プラトン（岩田靖夫訳）『パイドーン—魂の不死について』岩波書店、1998年、153頁。

ないような深い眠りは、魂の覚醒がやんだ状態ではなく、それが覚醒していることを感覚に伝える諸器官が眠っている状態である (275-76)。

さらに、アレクサンドロス大王、カエサル、ピョートル大帝などといった偉人は、人々の心に羨望の念、彼らのように死後も自分の名前が知られて欲しいという欲求を呼び起こすが、そうした魂の動きは、魂の不死を示しているという (277)。

## 世界のあらゆる民族の同意

続いてフルシチョフは、世界の多くの民族が魂の不死を認めていることを、自説の補強として引き合いに出す。彼はエジプト人、バビロニア人、シリア人、ペルシア人、ギリシア人、ラテン人、インド人、中国人、アメリカ人、メキシコ人、ペルー人の例を挙げ、「今も昔もあらゆる民族が共通に、この真理を基本的な信仰の真理とみなしている」とする (278)。

ここでココヴィンスキーは、ユダヤ人が「神に与えられた律法には魂の不死については何も言及されていない、罰や報いは全てこの世の人生に関するもの」と指摘する。ユダヤ人は魂の不死を信じてこなかったのか。

フルシチョフの答えは次のようなものである。十戒の最初の戒めは、「私は主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」(出エジプト記 20-2) というものだが、これは直接エジプトから導き出された人々にとっては真実であっても、100年、200年後の者にはそうでない。このことが示すのは、この言葉が「身体は死んでいながら不死の魂は生き続ける過去の世代にも、現在の世代にも」語られたものであるということである。その際、エジプトから肉体的に導き出しただけでなく、精神的(霊的)にも導き出した、即ち偶像崇拜の誘惑から解放したことをも語っているという。

さらにフルシチョフによれば、神は多くの個所で自分をアブラハムの神、イサクとヤコブの神と述べている。もし魂が身体と共に滅びるのであれば、神は既に死んだ者の神ということになる。しかし、神はこのように言うことで、彼らが肉体においては死んでいてもその魂は生きていることを示している (279-80)。

## 全ての賢者たちの同意

次に、哲学者たちがこの問題についてどう考えてきたかが議論される。

ココヴィンスキーは魂の不死、即ち来世でも罰や報いがあるという観念が善き民衆を作り出してきたことに触れ、「市民法は外に現れる犯罪を防ぐだけだが、こうした観念は頭の中でなされる犯罪すら防ぐ」という賢者の意見を紹介する。では、善き統治に資する掟を作った哲学者は魂の不死についても考えていたのか。ここでフルシチョフはピュタゴラ

ス、ソクラテス、プラトンの三人を筆頭に、タレス、ピュタゴラスの師シュロスのペレキュデース、ゼノンとソトア派哲学者、アリストテレス、キケローといった、魂の不死を肯定した哲学者を次々に挙げていく（281-82）。

一方で彼は、エピクロス、ルクレティウス、スピノザ、ホップズの4人を、魂の不死を否定した者として非難する。これらの哲学者は、原子論によって魂を分割され得るものとしたことで、その不死性を否定することとなった。先述のように、魂の不死に関する確信が人間の内面を支配する者である以上、このような考えは人間社会にとって有害であるとされる（283）。

### 魂の不死を否定する人々の個人的な振る舞い

とはいえフルシチョフによれば、実際のところ彼らは魂の不死の否定が誤りであることを感じ取っているという。彼らは著作に自分の名前を記し、それを死後に残すことに執着しているからである。さらに彼は「彼らの学説は時に魂、時に肉体についてのもので一貫性がない。魂の不死を否定しつつ、肉体的快樂ではなく徳の実行を唱えるエピクロスは、結果的に不死へ向け魂を創り上げている」「魂の不死の否定は、幸福な人をより幸福にすることがないどころか、不幸な人からは最後の希望をも奪うので、永遠の生の恐怖から人々を解放するためにこのことを唱えるのは適切ではない」と述べる。総じて、魂の不死を否定しつつそれを願う彼らの振る舞いは、単に彼らの論理の弱さ、無執着を示すものとされる（283-85）。

さらに彼はここで「魂の不死を否定する者は、自分の死後の恥辱という観念に耐えられるか」という問題を立てる。

魂の不死を強く否定するものの、潔癖な倫理観を持ち、掟にたがわず生きる人が、数々の不幸に見舞われたとする。状況を変えるためには大罪を犯す必要があり、そのことはこの世では罰せられず、人に知られることもない、ただし死後に全ての行為が明るみに出て、不名誉な者として墓が掘り起こされ、その記憶は恥辱にまみれ、おぞましい罪人としてその名が代々語り継がれるとしたら、この人物はどう思うだろうか（285）。

彼によれば、誰もそうしたことを行わないのは魂の不死に関する無意識の感覚のためなのだが、本人はそれを名誉の感覚のためと考える。しかし、魂も身体も完全に消えるのであれば、名誉などは本来どうでもよいはずである。このように魂の不死を否定する人々の証明は根拠がなく、彼らの振る舞いも矛盾したものである、とフルシチョフは結論付ける。

## 神の裁き

詩篇の引用を交えつつフルシチョフは、自然の秩序を観察することは、最高存在、神の計り知れぬ叡智、完全さ、善性、公正さを確信させると述べる。とはいえ、苦難に満ち、特に弱い者が悪の犠牲となる世界を一見する限り、神は創造物を置き去りにして関心を払っていないかのようである。しかし、神の裁きは人間が感覚的に思い描くようなものではない。神は人間に自由意志を与え、聖なる掟に従った善き者には報い、従わない悪しき者は罰を与える。こうした報いや罰は、死後の生を前提とすることにより初めて可能となる。従って、魂の不死を否定することは、神の存在を否定するか、少なくともその公正さ、完全性を否定しない限り不可能なのである（286-87）。

## 理性と哲学が信じるように命じる伝説に基いた信仰

最後にフルシチョフは、キリスト教の信仰をめぐる問題を精査する。興味深いことに、彼は「救世主の物語や、彼の弟子によって提示された教義」を探究するにあたり、法科学鑑定モデルを用い、次の点を明らかにすることを求める。「1. 事件がありそうになるよう準備したものは何か」「2. 事件がどのように実現したか」「3. 事件の証人は疑わしい者でないか」（288）。

彼によれば、上記の1は旧約聖書である。長いこと一民族のもとにあったこの書物は、キリスト生誕の前に既に当時の教養人の共通語ギリシア語に訳され、ユダヤ人だけでなく異教徒の手にも渡った。この本では、救世主の到来に関する約束や予言が記されており、その生まれの卑しさ、奇跡、ユダヤ人の不信仰、救世主の受難、その復活と栄光といったことが予言される。2に関しては、これらの予言が既実現したことが述べられる。そして、多くの民族が、迫害の危険をものともせず、地上の幸福を約束しない教えに従っていることは、福音史家や使徒たちが告げたことの真理を確証する。また3に関しては、事件の証人となった福音史家や使徒が無学で、名誉欲も持たず、本来地上の掟に従った方がより多くの利益が見込めた人々であったにもかかわらず、真理が彼らに伝道の道を選ばせたと述べられる。またフルシチョフは殉教者の存在についても言及し、彼等や使徒が伝える聖なる教えが、魂の不死と善人への報いを確信させるとする。

このような論証を行ったところで、大砲の音が聞こえてくる。「あれは我々に今日の日の出、私が沈むところを見られない太陽の昇ったことを知らせる大砲の音だ」（290）。こう述べてフルシチョフはココヴィンスキーと別れを告げ、妻と息子を託す。「全て仰る通りにします」（291）というココヴィンスキーの言葉が、作品全体を締めくくる。

#### 4. 受難者への挽歌

「プラトンの模倣をしつつ、魂の不死をめぐる似たような対話篇を書くこと」。本作品の「前書き」の記述によれば、著者が執筆の際にこのような課題を自らに課していた。では、結局のところ『パイドーン』、そしてプラトンという存在は、この作品においてどのような意味を持っているのか。

魂の不死をめぐる議論そのものに関して、シチェルバートフがプラトン『パイドーン』から直接受け継いだ要素は決して多くない。ミロシニチェンコも指摘するように、例外は「数学的な証明」に現れる、魂の不可分割性をめぐる議論であり、これは『パイドーン』(80B)における魂の不死に関する3つ目の証明を連想させる。<sup>23</sup> 魂の不可分割性が、その保存、不死を導き出すという点で両者は共通している。また先にも述べたように、悪人にとって魂の不死は決して望ましいことではないという論理も『パイドーン』に見られた。

しかしこれ以降、議論の内容はプラトンから離れていく、「全ての賢者たちの同意」ではプラトンの名も言及されるが、特に他の哲学者に比して大きな関心が注がれているわけではない。また、プラトンにおいて魂の非物体性とその不死に関する主張はイデア論と表裏一体の関係にあったが、シチェルバートフはプラトン思想のこの側面は受け継いでいない。プラトンに特徴的な身体への蔑視も前面に出てはならず、身体は魂が感覚を得る上で不可欠な道具とされる。物質世界の美や秩序は、神の叡智と完全性を認識するための重要な契機である。

シチェルバートフがフルシチョフの形象を通して描き出したソクラテスのイメージは、プラトン作品に現れるソクラテスとはだいぶ異なっており、むしろクセノポンの『ソクラテスの思い出』(メモラビリア)に登場するソクラテスに近いとされる。<sup>24</sup> 18世紀のヨーロッパでは、クセノポンを源泉とする説教者、市民としての「人間ソクラテス」のイメージが、「哲学者ソクラテス」のイメージと並んで広く知られており、ロシアでもソクラテスはクセノポンを通して早くから知られていた。ポレチカによる『ソクラテスの思い出』のロシア語訳が出版されたのは、プラトン作品の翻訳に遥かに先立つ1762年である。<sup>25</sup> こうした点も、『魂の不死に関する対話』の著者がプラトンとの連関を示す必然性の小ささを示している。

では、シチェルバートフはなぜわざわざこの作品をプラトンと結び付けたのか。そこに

<sup>23</sup> *Мирошниченко*. Очерки по истории раннего платонизма в России. С. 32

<sup>24</sup> *Козлова М.И.* Кросскультурные коммуникации в «Расговоре о бессмертии души» М.М. Щербатова // Диалог со временем. 2008. Т. 1. № 25. С. 145.

<sup>25</sup> *Костин А.* «Галантный» Сократ. К проблеме бытования образа исторической личности в русской литературе конца XVIII века // русская литература. 2005. № 1. С. 92.

は別の背景が存在する。

「靈魂」や「不死性」といった主題は「古来多くの哲学者が好んだ題目でありながら、靈魂不死説ほど説得力の乏しい教説はまれ」とされる。<sup>26</sup> シチエルバートフのこの作品にしても、論理の飛躍や根拠の薄い論証が散見され、「ある程度熟考された批判には絶えない」と考えられる個所が多い。<sup>27</sup> 例えば、魂の不死を否定しつつ、死後も自分の名前が知られることを望む人々の態度が、彼らの主張の矛盾を示すという主張も、論理的とは言えないだろう。

一方、アルテミーエワも述べるように、全般的にこの作品では社会的・政治的次元が形而上学的次元よりも重視されており、それ故に「死後の名声の必要性」をめぐる議論が存在論的議論と同列に置かれている。<sup>28</sup> 確かにこの作品ではキリスト教的な要素も加味されているが、「法科学鑑定モデル」を用いた教義の検討が端的に示すように、信仰はあくまで現世の社会秩序との関わりでとらえられる。魂の不死も、ここではキリストの再臨や人間の復活といったキリスト教的信仰の根幹と結び付けられるのではなく、悪人に対する神の罰を成立させ、社会の調和を維持するための前提条件として取り扱われている。<sup>29</sup>

ここで注目したいのはむしろ、「不名誉な死」、受難を待つフルシチョフという人物の形象が、ソクラテスのみならず、キリストを想起させることである。コズロワによれば、フルシチョフの発言を示す«Xp.»という略記号はキリストへの暗示であり、正教の伝統において聖書等で神聖な語を省略する習慣を想起させるという。<sup>30</sup> 6番目、7番目の「証明」で前面に出るキリスト教や聖書をめぐる議論は、この文脈の中で理解される。即ち、理性と法が求める手続きに従うことで、キリストや殉教者たちの正しさは証明され、魂が不死であることにより、地上で咎なくして殺された者もやがてその正しき生に対する報いを受ける。フルシチョフ（あるいはヴォルィンスキー）はここで、ソクラテス、キリストと続く、不正に処刑された受難者の系譜の中に位置づけられるのである。

こうしたことを考えれば、この作品は、女帝アンナにより殺されたヴォルィンスキー、およびその協力者フルシチョフに捧げられた、シチエルバートフによる哀悼の書であるといえる。そして、ここで改めて想起したいのが、1780年に刊行が始まったプラトン作品集の序文において、エカテリーナが「哲人王」になぞらえられていたことである。この作品集の翻訳刊行の主導権を握り、財政的な援助を与えたのは女帝であり、結果的に彼女は

<sup>26</sup> 哲学者波多野精一の言。根占献一（編著）『イタリア・ルネサンスの靈魂論〔新装版〕』三元社、2013年、18頁。

<sup>27</sup> *Мирошниченко*. Очерки по истории раннего платонизма в России. С. 32

<sup>28</sup> *Артемьева Т.В.* «Область дай уму...» // Мысли о душе. С. 64.

<sup>29</sup> キリスト教における魂の不死の思想に関しては、根占『イタリア・ルネサンスの靈魂論〔新装版〕』、23-29頁を参照。

<sup>30</sup> *Козлова*. Кросскультурные коммуникации. С. 144.

プラトンの哲人政治論を援用した自らの称揚に手を貸した。そのような文脈の中で、シチェルバートフは、プラトンの名を冠した著作を専制政治の犠牲者たちへの挽歌とした。このことが、プラトンを権力者から受難者の側に取り戻す試みに他ならなかったことは明らかであろう。<sup>31</sup>

---

<sup>31</sup> 本稿は、「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」プロジェクト型共同研究：「近代ロシア・プラトニズムの学際的研究」による「プラトンとロシア」研究会・研究発表会（2014年8月28日、於スラブ・ユーラシア研究センター）での報告に基づいている。報告の際には参加者各位より多くの貴重なコメントを頂いた。この場を借りて厚くお礼申し上げたい。